

けた

井口 昌平

近ごろテレビのニュースなどを聞いていて、「橋げた」のことを、トウシロウはほとんど「橋脚」のことだと思っているらしいことがわかって、はてなと思う。「橋の下駄（ゲタ）」と彼らは思いつくのであろう。いまいましいと思っても、それはやむを得ないところがある。

「けた」という語は、日本語の中に古くからあったものに違いない。しかし、現在では卓上電算機の広告などで「何ケタ」と言いたてるほかには、一般にはほとんど使われていない。その場合の「けた」と構造力学でいう「けた」とはかけ離れているように見えるけれども、「広辞苑」を見れば、その関係がかなりはっきりしてくる。つまり、「何けたの数」という場合の「けた」のものは、そろばんにあって、そろばんの珠（たま）を、いつつひとまとめに貫いている丸い棒のことを「けた」と呼ぶ、ということである。その「けた」ならば構造力学でいう「けた」に近い。

しかし、構造力学でいう「けた」のほうは現在では「知る人ぞ知る」ということになってしまった。その「けた」は専門家は英語の girder に対応するものとしているが、「有楽町のガード下」などと言って、その英語からの外来語が一般にほとんど定着していたことがあった。それは昭和「ひとけた」のころに始まったのではないと思う。しかし、昭和 40 年代には消え去っていったのではないだろうか。「ガード」が通用していたときには、「90 ホン以上の騒音のガード下」などと言い立てる人はなく、むしろそのすさまじい騒音に生活の楽しさと悲しさを同時に人びとは感じるだけであり、「ガード」という言語のひびきが、例えば有楽町駅のあたりの国鉄の架道橋のあたりで、上を走る国電などの発する騒音とうまく結び付いたことから、その「ガード」という語が広く行われたのであろう。

推察をもう少し続けよう。昭和 50 年代の今では、「ガード」と言ってみれば、「ガードマン」とか「ボーダーガード」の「ガード」かと思われるおそれがある、と思う。「けた」に対応する「ガード」が消え去って

いったのは、「ガード下」どころではないような騒音が、ちまたにみちみちているようになってしまったからであろう。

このことについて、土木技術者になんの責任もない。しかし、「けた」という古来の語が「下駄」とまちがわれたりすることになったことについて、縄張りがおかされたような気持ちになるのではないだろうか。次に、「どうしてそういうことになったのか」という疑問が出るはずである。

原因はいろいろあろうが、その中で当用漢字の採用によって「木へんに行」という漢字「桁」が使われないことをあげることができる、この漢字は「コウ」および「けた」と読み、普通には「衣桁（イコウ）」、橋桁、桁橋、何桁の数、桁はずれの何々ぐらいの場合にしか用いられない。その中で橋桁の場合には、音便のために、「はしげた」と読むのが普通である。そこで「橋の下駄」かと思われるようになった。しかも、「下駄」のほうも当用漢字流では「げた」とするのが正記法にかなう。

「けた」という語は万葉集にも出ていて、日本語にとっては長年のつき合いがあるのだけれども漢字とのきづなを断たれてしまうと、日本語の中で席を半分ほど失ってしまった、ということになる。同じような例は一般の語の中にはたくさん求めることができるようだが、土木用語の中ではこの例が目につく。

上にも書いたように、「下駄」と書くのも当用漢字の流儀にかなうものではない（その流儀ではそれを「ゲタ」とは読ませない）。しかも、日本文化の中から生まれたそのはきものが、いまでは日常生活の中からほとんど姿を消してしまっている。そうすると、「橋のけた」を「橋の下駄」かと思うこともなくなるのも近いことかもしれない。しかし、それよりも前に「はしげた」という語は「橋脚」のことだ、ということになってしまわないだろうか。

（筆者・正会員 工博 東京大学教授 生産技術研究所）

